



会長就任のご挨拶

交通機械設備設計事務所 横山 勝義

本年は、学会創立25周年に当たります。その記念行事として、学会を中心としたOR年表をつくること、今までの受賞論文をまとめた記念出版をすること、学会の長期計画をたてることを、3本の柱として、きたる9月に慶応義塾大学で開かれる秋季研究発表会の折に、記念パーティーが、もくろまれていると聞きおよんでいます。

25年の歳月は、人間でいえば、赤ん坊が一人前に成長し、人生の佳境に入る期間に当るわけで、学会の記念行事も、過去・現在・将来を見通して、新しい目標に向って、気分一新、さらに前進を計るべきときであるとの判断から決定されたものと思われまます。

同じ4分の1世紀の間に、日本の社会は、経済的な急伸長をとげ、世界の一流国に肩をくらべるまでに成長したものの、その後のエネルギーショックのため、景気は急速に減退しつつあります。景気後退と失業者増加は、世界的規模に拡大し、その渦巻の中で、日本の国が、外国から過去の成功の原因を詮索されたり、嫉妬とも思える政治的圧力をかけられたりしていることは、ご高承のとおりであります。これからは、決して日本だけが世界から孤立して独自の途を歩むことはない、そしてOR活動にとっても、このことはまったく同じであると痛感します。

輝かしい過去の経済成長に対して、日本のQCが、非常に高く評価されたことは、大変喜ばしいことであります。しかしQCが、比較的現場向き

で実務的であって、企業の中に容易に受け入れられたのに対し、ORは管理者向きで政策的であるがために、なかなか普及しなかったという違いがあるだけで、経済成長に対する寄与の度合は、ORは決してQCに劣るものではないと確信しております。

たとえば、コンピュータの爆発的な発達も、本当に世の中に役立たせるには、OR的な考え方の裏づけが、絶対必要であります。特に経験的科学技術、すなわち過去の失敗や経験を系統的に集大成した工学や経済学などの、これからの発展には、コンピュータに助けられたORの活用が、大いに期待されます。

このような、学会にとっても、日本の国にとっても、重大な時機に、会長の役目を仰せつかったことは、大変名誉なことであり、かつ責任重大であると身の引き締る思いがいたします。

さいわい前会長の松田先生とは、昭和34年に生産性本部派遣の“OR研修チーム”で、一緒にアメリカに渡った仲であり、また学会の会員の皆さまとも、多くのかたがたと長く親しくおつき合いさせていただいておりますので、前会長の意思を継承し、会員の皆さまのご支援を得て、この大切な仕事を果すべく、最大の努力をいたす覚悟であります。

何卒宜しく願いいたします。